

長崎男と天草女

荒木 忠久

長崎の開港は、元亀元年(一五七〇年)ポルトガル船が初めて長崎に入港したことより始まり、秀吉の時代、文禄元年(一五九二年)最初の奉行所を本博多町(現・万才町)に設置した。しかし、江戸時代となり、寛永十年(一六三三年)の鎖国令により、出島の地のみに外国との交易を許し、他藩の人の出入りを厳しく監視した。

当時の長崎の人口は、約五万人で推移していた。幕府は、長崎の地を天領(直轄地)とし、行政・外交・貿易・キリシタンの取り締まりなど幅広い政治を行うため、幕末(一八六八年)まで長崎に奉行所を置いた。当時の長崎奉行所は寛文三年(一六六三)の大火により焼失。再建後西役所は江戸町(現・県庁)に、東役所は延宝元年(一六七三)に立山に移した。東役所の建設に際し、その石材は寛文十一年(一六七二)天草の福岡城解体時の古材が再利用されたと言う。奉行所は総勢約千人に上る行政組織であり、江戸幕府の前線基地として重要な任務を行った。



長崎より天草を望む

長崎奉行は初代小笠原一庵から、最後の奉行・河津祐邦まで約120人が、その任に当たった。奉行はわずか2年余りの任期で、江戸へ帰任する時の土産は、何と十両(現在の一億円)とも言われる金品が贈られたと言われる。いかに、長崎が交易で栄えていたかの証になる。

時代が下り、西役所内に安政二年(一八五五)海軍伝習所を設け、その一期生には、勝海舟・榎本武揚などがいた。また、東役所近くには文政七年(一八二四)シーボルトの鳴滝診療所兼学舎(塾)が始まり、オランダ人ボンベが、安政四年(一八五七)本格的な医療を開始。その後、

などと肩を並べる幕府の御用商人となる。

また、鶴田文史著『天草五足の靴物語』に出てくる青年詩人たち(与謝野寛・木下左太郎・北原白秋・吉井勇・平野万里ら)が九州を旅して長崎茂木港から福岡港へ渡っているし、古くには、頼山陽も福岡を訪れている。このように、昔から長崎と天草は切っても切れない関係が、連綿と続いている。昔より天草の人達は、文化・芸術はもとより、あらゆる生業(仕事や生活)を求めて、あの手この手で天領長崎への入国を計った。そこには寺社への修行と称したり、結婚を偽装したり、物資を運ぶ船に便乗する等と色々手配し長崎入りをはたしている。長崎の地では富を求め、技術・芸術を磨き、人・物・金の情報が、各藩の発展にも大きな影響を与えている。ですから、長崎の人口は表向きは五万人でも、実際の人口はもっとも居たものと推測される。

そこで、長崎から見れば隣のような天草との往来が、盛んに行われていたのは、言うまでもない。

さて、私は今町の料亭「坂本屋」のあたりで生まれたが、そのルーツは天草に有った。もつとも、その前を調べると度会(三重県伊勢)の荒起田(荒木田)より下向し、筑後の藤原氏を祖とし、菊池氏より分家した志岐氏が、元久二年(二〇五)からおおよそ400年の間、天草荅北町(一帯)を統治した時代、志岐麟泉が領主となり全盛期を迎えた。筑後・三潞郡(ミヤコグニ)の東部には荒木村(現・久留米市荒木町)があり、其の地の人は荒木姓を名乗っている。それは私の十代前で、約二千人余りの人々が家系に関わっている。自分の歴史は名字・家紋・過去帳・お寺・教会・墓碑と、その由来などから、ある程度の事は判る。私の祖先は志岐の十七代城主・志岐諸経の家臣であるとはぼ断定。当時、天草は非常に貧しい地域であった。それは、生活の基本である米の収穫がままならず、年貢にも事欠いていた。農作物や、水の確保が難しく、争いが絶えない土地であった。その様な背景の中で、年貢米の取立てと切支丹弾圧が厳しく、ついに寛永十四年(一六三七)天草・島原の乱が起き、乱後、天草は天領となり、初代代官に鈴木重成が任ぜられている。鈴木氏は、庶民の暮らしを見て、年貢の半減を幕府に願ひ出て、その責任で切腹。私の先祖も、明和七年(一七七〇)ごろ長崎へ生活の糧を求めて手漕ぎ舟を使い、貿易商を目指して長崎に渡り、最初は江戸町に居を構えたと聞いている。(岡山市在住)

長崎大学医学部として発展した。同時期に、英語伝習所が奉行所の近く岩原目付屋敷内に設置され、それは長崎外国語学校から、長崎商業へと続く。さて、本題の「長崎男と天草女」であるが、江戸末期の諺にある「東男に京女」と同様に、長崎の男は男らしく粋で気風が良く、天草の女は従順で働き者だと言うことで、相性が良かったのであろう。又、地勢と治世の関わりから、幕末からの二時期(二年三月の間)天草県は、長崎府に組み込まれていた。

長崎の祭は「おくんち」に代表されるように、華やかで豪気である。また、鶴の港と称される美しい港での出船入船時の出会いの喜びと別れの哀愁が、江戸期より面々と続いている事の素晴らしさは、日本はもとより海外に誇れるものがある。私の時代は、「おくんち」の日は学校がお休みで、心が浮き浮きしたものだ。「おくんち」行列の中に、本石灰町の「御朱印船」があるが、朱印船主の中には熊本出身の武士で後に商人となった荒木宗太郎がいる。宗太郎は江戸初期に長崎に来て、朱印状を受け自ら海外へ出かけ、貿易を取り仕切った人物で、安南(現・ベトナム)の、王族の娘を妻に迎え、日本に連れ帰り「おくんち」を盛り上げる原動力になったと言う。

ペーロンは、寛文十三年(一六七三)天草・福岡や兵庫・相生市へ長崎の人が、移り住み指導したもので、各地でも、毎年華やかさと男らしい豪快さで、祭りを盛り上げている。また、天草北西部の五和町二江には「通詞島」(周囲約4キロ)がある。ここは、中世(武家体制)封建制が確立した時代)から、南蛮貿易の通訳達が住んでいた話や、遠海へ漁に出て外国語をマスターした漁師が居たことに由来しているとも言われている。そして何より、九州が生んだ天才商人がこの地に居た事も忘れてはいけない。

河村哲夫著『天を翔けた男』に出てくる西海の豪商・石本平兵衛である。石本は、天草で成功し長崎へ来て店の名を「阿部屋」と称し、文化十三年(一八二六)三〇歳の頃経営の拡大を推し進め、後に老中となる水野忠邦に先行投資として千両箱を差し出している。そのかいあって、鴻池や三井・住友

風信

○長崎の八月は、九日の原爆忌・長崎九條の会の平和集会に始まり、十三日より初盆・十五日夜の精霊流し。十六日夜の送り燈籠、そして小・中学生の夏休み終了でおわる。

○今年も暑い夏ですね。暑中御見舞申し上げます。

○長崎の盆は昔より全国的に有名で、各種の「名勝案内」にも紹介されている。長崎の「お盆」には「盆踊り」はないが、初盆の家では十三日より、一般の家では十四日の夕方より一家をあげて墓に行き墓前で祖先の霊をむかえ、酒宴をはり、花火をあげ夜おそくまで賑かであったと記してある。そして十五日の夜は、早目に墓を引きあげ、八月に入ると準備し用意していた精霊船の精霊流しにかかる。戦前は夜の九時頃より、町内自慢の精霊鐘の音にあわせ「ドイ〜」の掛声で出発していた。勿論女の人は船を海に流すので船について行かないし、先頭の印燈籠につく人達は「江戸腹掛けの粋な若い人達」が多かった。

○盆の語源は、古代インド佛教語のUllam bānaを語源としている。言葉の意味は「さかさまに懸ける」という意味であり、それより転じて苦しんでいる人を救うとの意味となつている。

○我が国で最初に此の「ウラボン(盂蘭盆)会を行ったのは齋明天皇三年(六五七)以来の事であると記してある。

○昔の長崎の盆行事は、旧七月一日初盆の家では門口に迎えるの燈籠を下げる事に始まり、十三日夜は「迎え団子」を用意し、夜中の子ノ刻(十二時)精霊様が家にお帰りになるので家内一同・玄関に坐り、お出むかえしたと記してある。

○長崎県下の盆の時に供えられた料理の各種については、長崎純心大学博物館刊の『長崎学・続食の文化史』にまとめられているので参考にして戴くとよい。

○盆の十六日、町の人達は「精進落ちの日」といつて冬瓜と鶏の煮込みを食べる。(初盆の家では十七日に食す。と足立正枝の長崎風俗考に記してある)

○今月ご寄贈を戴いた書籍

『長崎大学医学部 創立二五〇周年記念誌』一九八七年十一月オランダ海軍医ポンペ先生が長崎医学伝習所を創立以来一九八七年十一月が五〇年となるので其の記念誌と発刊された書籍で祝辞・記念講演等・三七三Pの大冊であった。○『開港五都市モボ・モガ写真集』安政五年五月(一八五九)安政の開国により五港が開かれ、モダン・ボーイ・ガールの言葉が生れた。楽しい写真集だった。(横浜BankART 1929・二、〇〇〇円)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

